

「釧路地方ノ堅穴」について

石川 朗*

Report of “the pit-dwelling of Kushiro region”

Akira ISHIKAWA *

Keyword : 川合眞平、堅穴、完成の途上、第一臨時教員養成所、地理教育

はじめに

釧路市埋蔵文化財調査センターに「釧路地方ノ堅穴」という一葉の図が残されている。同図が収蔵された時期や経緯は不明であるが、これは昭和初期に北海道廳立釧路高等女學校（現北海道釧路江南高等学校）の教員であった川合眞平が作製したもので、報告に相当する「釧路近郊の堅穴に就て(マ)」と「堅穴分布石膏模型」が一連の業績になる。その人物像はこれまで同校の五十周年記念誌（記念事業協賛会編1971）に垣間見る程度であったが、僅かな手掛かりをもとに調査したところご遺族と連絡が取れ、新たな知見を得ることができた。小稿ではこれらの業績について社会的背景や地域における堅穴研究の動向を交えて記録する。

冒頭ではあるが、池谷ゆり子様にはご尊父について多くのご教示を頂戴した。栗原雅也（浜松市立博物館）、種石悠（北海道立北方民族博物館）、佐藤由紀夫（岩手大学教育学部）、中村勇（中村文具店）の各氏からは、池谷様の紹介や関係資料の提供にあたりご協力を賜った。皆様に心から感謝申し上げたい（註1）。

1. 川合眞平の経歴（写真1）

川合は1905（明治38）年、静岡県浜松市で出生した。初等教育修了しばらく後に進学を志し上京、在京中は医家などで書生生活を送っていた。その後、1929（昭和4）年に東京高等師範學校（以下、東京高師）に置かれていた第一臨時教員養成所（以下、第一臨教）歴史地理科に入学、1932（昭和7）年、第一臨教を卒業、新任の歴史地理教員として北海道廳立釧路高等女學校（以下、釧高女校）に赴任した（東京文理科大學編1929、1933）。釧高女校は1919（大正8）年に北海道で5番目の廳立高等女學校として釧路町茂尻矢に開設されていた。写真1は教職員の集合画像で後列右から2番目が川合、6番目が第三代校長の石塚甚衛門、背景の丘は1935（昭和10）年に史蹟に指定されるモシリヤ砦跡である。赴任間もない同年4月7日、石塚校長とともに釧路考古學研究会主催の遺跡座談会に参加する。座談会は招聘者（市長、視學、警察署長、学校長・教職員、郷土研究者）への案内、話題（クシロの語源、舊警察署跡のチャシ、お供山・春採湖畔・春採公園内のチャシ、第五校わきの地層、天寧及び東釧路の貝塚、市や郊外の堅穴群、知人岬の聖地）の事前提示、新聞社による開催周知、会録の紙上公表（釧路新聞1932）などの経過から同會の周到な準備のもとに開催された。1933（昭和8）年、夏季休暇を利用して堅穴の実地調査に着手、冬の追加調査を経て堅穴図を作製、1936（昭和11）年、その成果を新聞



写真1 廳立釧路高等女學校在校時の画像（撮影年不明）

紙上で報告した（川合1936a）。釧路在職は同年5月までの4年間でそれ以後は、長野県屋代中學校（1936～1938）、岐阜県恵那中學校（1939～1941）、愛知県豊橋中學校（1942～1945）、静岡県浜名高等学校（1946～1948）、静岡県浜名北高等学校（1949～1964）、浜松短期大学幼稚園養成所・同短期大学（1965～1980）で教職を歴任、1982（昭和57）年、浜松市で逝去した。

著述はこのほかに「幕末外交史に於ける官寺の位置」（1936b）、「歴史地理学上より見たる三方原台地と其の周辺」（1967）、「ロシアの南下政策と日本」（1970）、「囲郭集落」（1972）、「Canada. U. S. A紀行」（1976）の5編がある。「幕末外交史…」は釧高女校時の執筆である。「囲郭集落」では釧路地方の堅穴分布とチャシの関係を例に先史時代や北東アジア諸民族の防衛施設について考察している。

2. 堅穴調査の成果物（写真2、3）

(1) 釧路地方ノ堅穴

図幅は余白部分を含め縦100cm、横72cm、木製パネル水貼り仕様で余白に「昭和八年八月調査（一点ハ一堅穴）」と記されている。底図は陸軍陸地測量部5万分の1地形図を6000分の1に拡大調製したもので等高線間隔は10m、「微細なる地形の実状は調査に當り之を加減したという（川合1936a）。

図の範囲は多くの堅穴を確認した釧路川下流域左岸の釧路段丘を中央に配し、南側は春採湖全域、北側は釧路川に合流する旧阿寒川及び別保川河口、西側は釧路川河口と付近の海岸線がそれぞれ収められている。地形は水域と低地面を薄青、段丘面を薄茶で色分けし、国鉄、臨港鉄道、道路、官公庁、駅、学校、浄水場などの公共施設が適確に示されている。凡例は堅穴を■、釧路考古学研究会が先に紹介した先住民族遺蹟（吉田編1933）の

* 釧路市埋蔵文化財調査センター Kushiro City Archaeological Operations Center

うち幣舞の古戦場、東釧路貝塚、城山町のチャシ（モシリヤチャシ跡）、春採湖畔のチャシ（ウライケチャシ跡）、チャランケチャシ（ハルトルチャランケチャシ跡）、石器製作所跡、知人岬の聖地を \cdot で示したほか、キムウングルコタンチャシ跡とチューカツナイチャシ跡の位置が記されている。堅穴は512個があり、形状、深さの記述から擦文期の所産で、立地等から概ね30群に区別できる。

(2)「釧路近郊の堅穴に就て」

1936（昭和11）年4月14日付け釧路新聞を【上】とし【中】【下】の3回に分けて掲載された。6000字ほどのレポートで章立ては下記の通りである。

はしがき

- 1 地形と堅穴
- 2 堅穴の分布
- 3 堅穴の位置と其の考察(一)、(二)
- 4 堅穴の構造及発掘物
- 5 堅穴と他の遺跡との関係
- 6 堅穴民族に就いて
- 7 結び



写真2 1936年4月14日付け釧路新聞

はしがきでは、考古学的資料の豊富な釧路地方においても近郊の堅穴群落は「頗る興味のあるもの」で「記録の上にも之を残さうと思ひ…問題を論議する前に先ず私共は出来るだけ多くの研究資料を蒐集し然る後之等を通して帰納的に研究しなくてはならぬ…」と研究の対する基本姿勢を示すとともに、堅穴分布図は今後も調査を重ね情報を追加しなければならない「完成の途上」であることを明言している。なお、調査方法は、現地踏査、地域住民からの聞き取り以外に小規模な発掘を含むことが記述から窺える。

1は釧路の地形を概観した項で、釧路の堅穴が本州と比べ「堅穴の底を掩ふ表土の厚さ」から極めて新しい時期とする認識を示した上で、堅穴が群集する台地が隆起運動によって形成された段丘であることを地域の偽層（斜交層理：達古武沼北岸露頭）や自然貝層（湖畔小学校裏や天寧神牧場入口露頭）の分布を織り交ぜ解説している。

2~4は堅穴の分布や構造に関する各論で、地域別にみた分布の濃淡から土地の選択が日照や河川と結びついた水産資源・流木等燃料・飲料水の調達と密接な関係することを考察し、すでに滅失した堅穴群（御供山から知人に及ぶ丘と城山町水天宮東側）にもふれ当地域が「先史

時代の文化の一中心地を形成してゐた事」を推定している（註3）。堅穴については「九尺四方位」の方形をなす、床面に「爐跡」をもつ、群集するといった普遍性ととも群集域の中央に大形堅穴が位置する、遺物量が堅穴によって異なることを見出している。

5は、チャシや貝塚との関係を論じた項である。チャシについてはその周辺で堅穴数個が「守護するが如き分布」をなす事象（城山町のチャシ、春採湖畔のチャシ、チャランケチャシ）に着目し、両者の共時性を想定したほか、その立地や「縄張りされた土地・砦」という意味、解釈から導かれる軍事的意味のほかに「平素は宗教的に神聖視された」空間であり、チャシ壕に「神聖なる地域を轄する恰も鳥居の如き用」をなすことを付加した。貝塚については「東釧路驛の後方」で堅穴の分布と重なって発見されているが層位的に深い水準にみられることから共時性の認定は留保している。また関東地方の貝塚分布を記し、釧路原野（湿原）を取り囲む台地縁辺からもそれと同様に海性の貝塚が発見されることを予想、期待を寄せている。

6は堅穴を使用した民族に関する項で、日本石器時代住民論争（斎藤1974）を概説した後、現在では形質人類学からの小金井良精（1904）や考古学的調査等に基づく河野常吉の研究成果（1908a, b）からアイヌ説が定説化していることを紹介し、自らも「堅穴民族とチャシ築説の民族は兩者より出る遺物の形式が類似してゐる点」、「堅穴とチャシとの関係」、「アイヌの傳説」からアイヌ説をとっている。

7は結論の項で「堅穴は先史時代の穴居の名残であつて其の分布は彼等の衣食住即ち生活と密接なる関係にあり、然も軍事的な宗教的必要によりチャシの發達を見、社会生活の一中心としたものと考えられる」とまとめている。

(3)「堅穴分布石膏模型」

報告で「一萬二千分の一の石膏模型を作って學校に保存してある」との記述と写真が掲載されているのみで現存しない。教材利用を目的としたものとみられる。

3. 堅穴調査の背景（表1、写真3）

川合の第一臨教入学から長野県への転任までの日本は世界恐慌を契機に農村は疲弊し経済や文化が混乱する状況であった。その過程で柳条湖事件、血盟団・5.15事件、天皇機関説事件、2.26事件が発生し国内矛盾を中国大陸などへの本格的進出によって解消しようとする序章期であった。ここでは、川合の堅穴調査に関連する第一臨教と釧路時代の諸相を整理する。

(1) 第一臨教時代の検証

臨時教員養成所（以下、臨教）は「師範學校中學校高等女學校ノ教員タルベキ者ヲ養成スル」目的のもと1902（明治35）年に公布された「臨時教員養成所官制」（勅令第百號）及び「臨時教員養成所規定」（文部省令第八號）に基づき東京帝國大學、第一・第二・第三高等學校、東京外國語學校に附設された5箇所を嚆矢とする。川合の入学時には全国16箇所に拡大し、1910年から1920年にかけて急増した中學校、高等女學校における教員不足や無資格教員の解消に寄与していた（註4）。臨教の施設と教員は設置母体校の借用・併任であったことから「低コストでの教員養成ができ

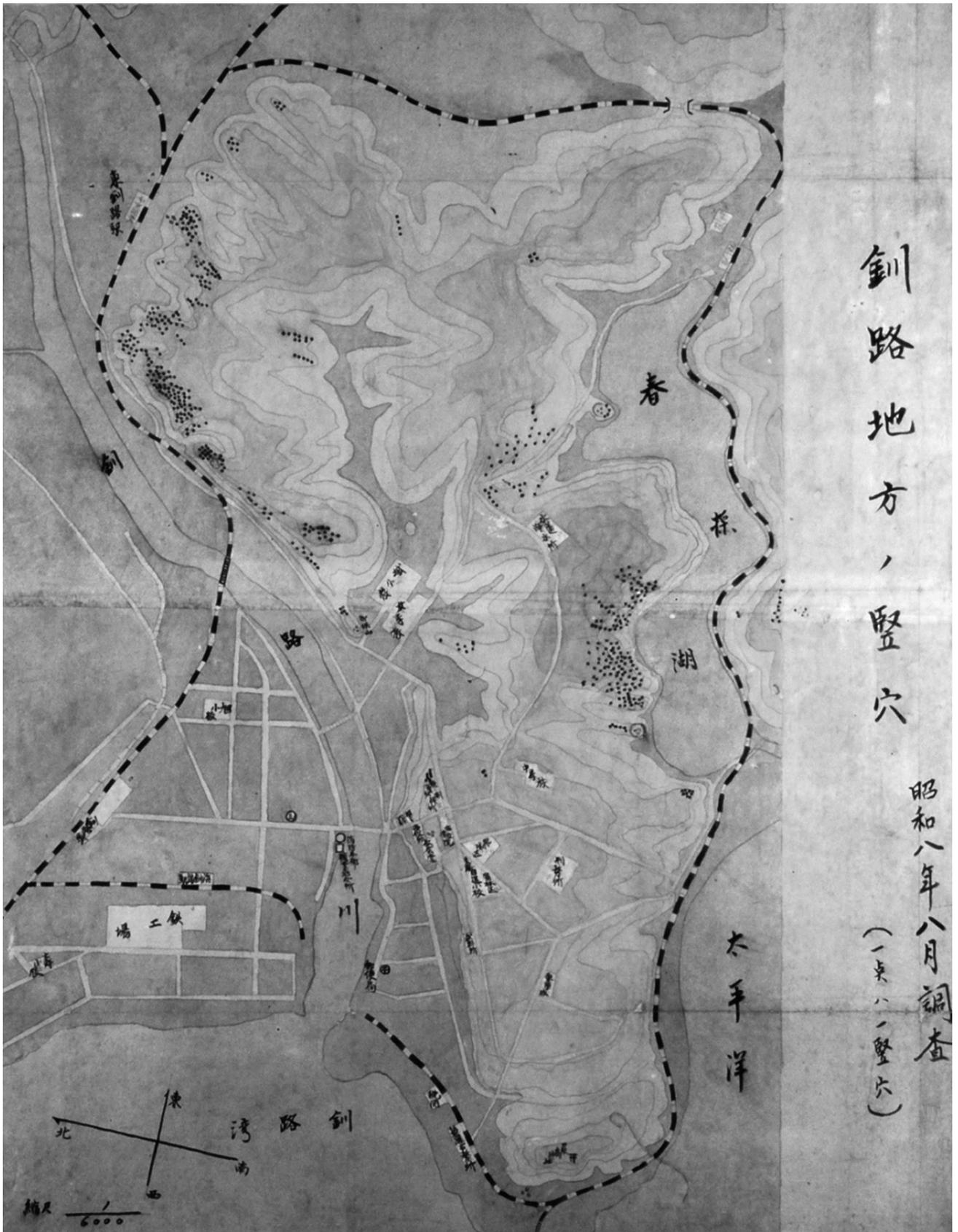


写真3 釧路地方ノ堅穴 (川合 1933 調査)

…」、「安易な設置・廃止が中等教員養成政策における需給のバランスーとなつて」いた。また「…教員の速成が主目的で（中略）高等師範学校ほどの教育的教養より当該学科の修養が第一義であり、その内容は臨時教員養成所規定を標準としながらも附設母体校の事情を考慮して大幅な変更が認められており、各臨教の性格が附設母体校によって大きく規定されていた」という特徴が指摘されている（杉森1997、2000）。当初の臨教規程では学科は国語・漢文、英語、数学、博物科を置き、修業年限は2箇年、受験資格は中学校卒業程度、授業料は徴収せずと定められた。歴史地理科は1922（大正11）年に追加されたもので、その学科目は修身、教育、歴史、地理、法制及び経済、英語、体操（随意）であった。1912（明治45）年には「臨時教員養成所卒業生服務規程」（文部省令第八號）が定められ、給費の有無によって1～3箇年の教育に関する職務従事が卒業生全員に義務付けられた。

師範学校規程及び教授要目は川合の3年次に改正が行われている。改正規程では「…在學スル生徒に課スヘキ學科目及其ノ程度ニ關シテハ仍従前ノ既定ニ依ル但シ本令ノ規定ニ依リ又ハ之ヲ斟酌スルコトヲ得」とあることから、改正内容が臨教生に対しても反映されたという前提で「修身」と「地理」に関して当時の師範教育を確認する。修身（第9條）では、「…教育ニ關スル勅語ノ旨趣ニ基キ道徳上ノ思想及情操ヲ養成シ鞏固ナル意志ヲ鍛鍊シ殊ニ我ガ國體ニ關スル信念ヲ養ヒ教育者タルノ人格ヲ陶冶シ實踐躬行ニ導キ…」、「道徳ノ要領ヲ授ケ就中我ガ國民道徳ノ由來ト特質トヲ悟ラシメ建國ノ體制及國體ノ本義ヲ明ニシ國家、社會及家ニ對スル責務竝ニ人格修養ニ關シ必要ナル事項ヲ知ラシメ…」とあり、「國體明徴の思想に基づき、すべての國民道徳を肇國の精神に結びつけ」た思想が改正前と比較し強く示されていた（豊泉2015）。地理（第14條）では「…國民タルノ自覺ヲ促スニ資シ…」とあり、修身同様「國民精神の涵養が求められ」これに基づき新たに「地方研究ヲ課シテ地方ノ風土ニ關スル沿革及情勢ヲ理解セシメ…」とし教授要目で3項目にわたって注意を付加している。

歴史地理科の修業年限は3年で、在学中の専科講師・副手は、有島巖・木代信一・斎藤斐章・中山久四郎・藤本治義・峯岸米造・田島春吉・森本六爾（以上、歴史学）、内田寛一・武見芳二・田中啓爾・花井重次・山本幸雄・榊田一二・山下忠平（以上、地理学）が在籍していた。彼らも母体校の東京高師または東京文理科大學との併任である（東京文理科大學編1929、1930、1932）。東京高師の地理学教室は、1902（明治35）年にドイツ留学から帰国した山崎直方を主任教授として置かれたもので「日本における近代地理学研究・教育の発祥の地」といわれている。1929（昭和4）年には東京文理科大學（以下、文理大）の創設に伴い再び山崎直方を迎え、東京高師との兼任で田中啓爾を助教授とし自然地理学・人文地理学教室を置いた。東京高師・文理大の地理学はこの二講座制に加えて多彩な分野の講師を揃えていたことから「…野外での臨地調査・実証的研究と自由な研究分野の選択とその指導が他大学に比べ大きな特色（中略）伝統」であった（尾留川1977）。講座の運営は山崎が逝去したことで、実

質的に田中があたっていた。田中は福岡県師範学校を経て1912（明治48）年東京高師本科地理歴史部を卒業、長崎県師範学校と東京高師附属中學校で教諭を務めた後、1923（大正12）年東京高師教授、文部省中等学校教員（地理科）検定委員、1937（昭和12）年文理大兼東京高師教授などを経て、1949（昭和14）年に退官した。田中の地理教育観は「教育指導上における具体的な」内容を著した多くの論文や教科書にみることができる。その細目は「直観教材（グラフ、地図、表、写真、模型等）」の適切な使用、地人相関的記述と歴史的な説明、地理区の究明と設定があり、知識偏重・暗記型の教授形態から「地図を読んで地理的理法を理解させようとする」ことが主題であった。こうした背景には、田中が「…教諭経験をもち、現場からの視点を失わなかったこと（中略）各地の中学教員を対象として講演して回るなどの活動が多かったこと」で「大学との系譜と現場からの系譜が収斂したところに位置していた」と指摘されている（近藤2005）。

また、東京高師・文理大の地理学は一貫して臨地調査・巡検を研究基礎とする地誌学に特徴があり（田中1949、東京文理科大學1955 註5）川合の図や報告にみる堅実な地理学的思考や研究姿勢は、臨教の特殊性や東京高師・文理大の教授環境、学風のなかで培われたことは想像に難くない。

川合は石器時代住民論や貝塚分布についても言及していた。この論争は後半期で北千島における考古学・人類学調査（鳥居1901）、形質人類学（小金井1908）などの研究成果によりアイヌ説が主流となり、坪井正五郎のペテルスブルク客死（小金井1913）でほぼ終息した状況であった。それに代わって考古学界では東北帝國大學人類学教室による宮城県里浜貝塚の発掘（1918年）を嚆矢に東京帝國大學人類学教室の千葉県加曾利、姥山、下総上本郷、史前学研究所の埼玉県真福寺、坂詰仲男による神奈川県内の調査など貝塚遺跡の分層的発掘調査が相次いで行われ、土器編年や集落研究が急速に進展していた。地理学界からも貝塚分布から縄文時代の旧海岸線を復元する研究成果が提示され（東木1926）、「実証的研究の確立期」を迎えていた（金子浩昌1992、勅使河原1988）。この当時、東京高師・文理大には森本六爾が在籍していた。森本は三宅米吉、高橋健自といった東京高師所縁の先学に師事し、1924（大正13）年から副手（史学陳列室）を勤めていた。しかし、専門は弥生時代以降であること、1931（昭和6）年に職を辞しフランスへ私費留学しており臨教生との係りは希薄とみられる。むしろ川合が考古学界の最新の研究動向に目を払い積極的に情報入手していたからこそ当時としては的確な理解、言及を可能にしたものと考えられる。

表1 第一臨時教員養成所歴史地理科修了者の進路

	出身地と赴任地 が同じ	出身地と赴任地 が異なる	高等師範研究生 文理大、幹部候補生	計
1924(T13)年3月修了	6	20	0	26
1926(T15)年3月修了	8	11	1	20
1929(S4)年3月修了	5	16	0	21
1931(S6)年3月修了	2	21	4	27
1932(S7)年3月修了	3	4	6	13
計	24	72	11	107

表1は1924（大正13）年から1932（昭和7）年までの第一臨教：歴史地理科卒業生の進路一覧である。この間



写真5 佐藤直太郎・釧路考古学研究会 釧路市文化賞受賞祝賀会画像

1909（明治42）年、鈴木千代巳、田邊信一は鹽田弓吉の依頼により8個の堅穴群を調査し、支廳・税務所官舎・測候所敷地で200個程の堅穴を確認した（鹽田1910）。これは現在の幣舞・幣舞2遺跡（西編1990、石川編2005・2009）を含む位置で、坪井の調査地もこの範囲に重複する。この地域は官庁街的な発展を遂げたため改変の進行が速い土地柄であったが、明治末頃までは堅穴群が広がる風景を見渡せたことがわかる。

1924（大正13）年、北海道史蹟名勝天然紀念物調査報告書が上梓された（北海道廳編1924）。河野常吉は茂尻矢丘上の16個からなる堅穴群について画像を通して紹介し、「…室蘭厚岸と共に史跡に富み人類學及考古學に關する重要な遺蹟多し」と報告した。

1926（大正15）、「人類學的探究」を目的に京都帝國大學の清野謙次が北海道、樺太を訪れる。清野は釧路中學校長の阿部與作などから洞窟、チャシ跡、貝塚

などの情報を得た上でキムウングルコタンチャシ跡付近の堅穴を調査し、晩期縄文土器、擦文土器、紡錘車鉄製品などを発見した（清野1927、1966）。

川合報告の前年には、釧路第四尋常小學校（後の市立旭小學校2007年統廃合）で代用教員として勤務し、後に立正大學考古学研究室を主宰した久保常晴が、茂尻矢貝塚、俗称御供山、市公会堂、木村炭山附近の堅穴に関して報告している（坂詰1977、久保1935）。

佐藤直太郎は、釧高女校在籍頃から遺跡踏査に着手し、その成果を戦後、報告した（佐藤1960）。北海道は近代考古学が明治日本に導入された直後から石器時代住民論争の舞台であったが、そのなかでも釧路は堅穴の街として衆目された研究地であった。

川合が残した遺跡情報は現在までにどう変化したのであろうか。表1に川合図の内容と現在の埋蔵文化財包蔵地（2012釧路市教育委員会）との関係を示した。これは図の精度や後年の地形改変を考慮する必要を含むが、川合が示した堅穴群で包蔵地との関連が窺えるものが18群：411個とそれ以外のもの12群：101個に整理できる。前者については1963（昭和38）年以降、発掘または範囲確認調査により105個が記録保存されたがその比は23%に留まる。また、現在も堅穴の窪みが確認できるものは、史跡に指定された春採台地堅穴群、ハルトルチャランケチャシ跡（以上、1935年指定）、東釧路貝塚（1970年指定）に残る54個で堅穴総数の1割に過ぎない。これは第2次世界大戦後の住宅需要の急増に対応して行われた土地区画整理事業の進行を如実に反映したものである。特に緑ヶ岡北部地区における事業は「…市街地と變化し漸次埋滅の一路を辿りつつある」とみた川合の予測を現実とした（註8）。

表2 川合の確認堅穴と埋蔵文化財包蔵地の関係

堅穴群 仮No.	川合（1936-1）の記述		現在の埋蔵文化財包蔵地との比較・対照				
	位置	確認した 堅穴窪み数	町名	相当または関連する包蔵地	発掘または 確認した堅穴数	現存する 堅穴窪み数	堅穴に関する調査など （数字は発見された擦文期の堅穴数）
1	御供山後方 東釧路驛 に至る台地	5	貝塚	貝塚町東遺跡付近	0	0	2003年試掘(0)
2		6		東釧路3遺跡付近	0	0	1977年発掘(0)
3		4		東釧路2遺跡付近	0	0	1966、1967年発掘(0)
4		26		東釧路貝塚及び南側台地	6	16	1966・1968・1969・1992年発掘(6)
5		2		雪印東遺跡付近	0	0	2011年試掘(0)
6		25		材木町5遺跡付近	16	0	1987・1988・1989年調査(16)
7		7		-	0	0	-
8		31		雪印構内遺跡及び周辺	1	0	1984・2006年試掘(1)
9		18		貝塚1丁目遺跡及び周辺	3	0	1969・1971・1972・1973年発掘(3)
10		72		材木町1、2遺跡及び周辺	3	0	1990年試掘(3)
11		6		材木町3遺跡及び周辺	3	0	1990年試掘(3) 2014年工事立会(0)
12		20		緑ヶ岡1遺跡・キムウングルコタンチャシ跡付近	1	0	1963年発掘(1)
13		11		-	0	0	-
14		9		-	0	0	-
15		16		-	0	0	-
16		5		城山	(モンリヤチャシ跡北東側)	0	0
小計		263		33	16		
17	春採湖北岸	23	春採 鶴ヶ岱 千歳町	鶴ヶ岱4遺跡及び周辺	2	0	1995年試掘(1)、1996年発掘(1)
18		16		-	0	0	-
19		4		ハルトルチャランケチャシ跡内	0	7	1980年北海道教育委員会測量
20		58		春採台地堅穴群及び周辺	11	31	1980年発掘(11)
21		83		千歳遺跡及び周辺	1	0	1984年発掘(1)
22		6		(ウライケチャシ跡北側)	-	-	-
23	春採湖南岸	12	春採	-	0	0	
24	東屋総本店傍ら	9	柏木町	-	0	0	
小計		211		14	38		
25	-	14	緑ヶ岡	緑ヶ岡6遺跡	8	0	1970・1971年発掘(8)
26	-	4	-	-	0	0	1986年工事立会(0)
27	火薬庫附近	4	-	-	0	0	2005年試掘(0)
28	-	7	住吉	鶴ヶ岱2遺跡周辺	0	0	-
29	中學校横	2	富士見	-	0	0	-
30	税務所横	7	幣舞	幣舞2遺跡周辺	50	0	2004、2008年発掘(50)
小計		38		58	0		
総計		512		105	54		

北海道では1972（昭和47）年から埋蔵文化財包蔵地の周知徹底を目的に、北海道教育委員会及び市町村による分布調査が開始された（西脇ほか2018）。釧路市の場合、堅穴という可視情報の大半は失われた。しかし現在の包蔵地資料は、川合図や佐藤の記述を基礎にした釧路市立郷土博物館の澤四郎や帝国日本の教育から解き放たれた高校生たちによる丹念な現地踏査の集積であり（石川編2012）、周知の有無を問わずそれらとの関係に留意した文化財保護の取り組みは今後も継続しなければならない。

5. 成果と課題

静岡県に生まれた川合眞平は下積み生活を経て東京高等師範学校に附設されていた第一臨時教員養成所歴史地理科に進んだ。当時の日本は世界恐慌、農村恐慌を契機に経済や文化が混乱し、矛盾解決の方策として日中・太平洋戦争に進む序章期であった。第一臨教で川合は、田中啓爾を始めとする講師陣から徹底した臨地研究を教授され、実証的・帰納的方法論に基づいた地誌学を修得する。関東地方の貝塚調査や石器時代住民論の動向といった考古学的な素養もこの頃、自身のものとした。初赴任した廳立釧路高等女学校は北海道の遺跡を特徴づけるチャシ跡・堅穴群の只中にあり、釧路は明治の頃から考古学研究が盛行した土地であった。川合は堅穴を素材に臨地研究の実践を通して教育現場への成果還元を志向した。堅穴の多くは戦後の土地改変により失われたがその成果は埋蔵文化財保護に関する重要な資料となった。また川合図は札幌市琴似川（羽賀1975）や石狩川流域の堅穴分布図（高畑1894、北海道廳編1918）と同様に北海道の遺跡原風景を記録したものとして史料、文化財的価値が高い。

本稿の内容は教員養成の歴史、東京高等師範学校を中心とする地理学界の動向などに関し理解が浅く凡庸であることは否めない。諸氏のご指導を請うものである。当時の地理教育の一側面を表す「郷土研究運動」（小田内1931）や第一臨教における歴史地理教育の実態、田中啓爾の北海道での足跡なども未着手であった。今後の課題といたしたい。

註

- 文中、敬称は省略させていただいた。
- 釧路市指定文化財『釧路新聞』は当該年度を欠くため安倍寛治スクラップ帳8号を原資料とした。
- 御供山から知人に及ぶ丘はモンリヤチャシ跡より下流の釧路川左岸段丘縁、城山町水天宮東側は北海道教育大学釧路校付近をそれぞれ示す。
- 遺跡座談会に参加した釧路中學校教員の安田惺（歴史地理）、日高盛春（博物）も第一臨教卒業生で安田は地歴同好会を組織している（釧路中學校交友會1934）。
- 田中は、東京高師・東京文理大在職24年間に東京高師歴史地理部・第一臨教歴史地理科・退職軍人講習地理科教員養成所修學旅行、東京文理大地理學科學生合同研究、同卒業論文作成指導旅行、文部省科學研究費等旅行、大塚地理學會研究遠足、講習會講演會及び實地指導、府縣學校視察及び巡歴、東京市地理教室特別指導、鹽及び魚の移入路調査旅行、全

國地歴教員團體旅行など230回以上の臨地調査に加えて地方講習会で札幌、旭川周辺のほか美幌峠、弟子屈、摩周湖、雌阿寒、釧路を訪れている。

- 釧路考古學研究會の動向は富水の論考が詳しい（富水1976）。
- この穴居跡は現在のノトロ岬遺跡とみられる。
- 当時の釧路市は国勢調査による10万人以上の都市を対象とした人口増加率をみると1950～1955年間で川崎市に次いで全国2位、次の5年間で6位であった（山本1974）。土地区画整理事業期間（1933～1970年）に釧路市立郷土博物館の澤四郎が東釧路2、東釧路貝塚、貝塚町1丁目、緑ヶ岡1の発掘調査を実施したが堅穴群は1965年頃までにほぼ壊滅したという（澤1964）。

引用・参考文献

- 石川朗（編）. 2005. 釧路市幣舞2遺跡調査報告書 I. 釧路市埋蔵文化財調査センター, 釧路.
- 石川朗（編）. 2009. 釧路市幣舞2遺跡調査報告書 II. 釧路市埋蔵文化財調査センター, 釧路.
- 石川朗（編）. 2011. 釧路市内高等学校郷土史研究部資料調査報告書. 釧路市埋蔵文化財調査センター, 釧路.
- 内堀玉男・牧 昌見・対村恵祐. 1961. 第2部第2章中等教員の養成. 教員養成の研究（中島太郎編）, p143-199. 第一法規出版株式会社, 東京.
- 小田内通敏. 1932. 郷土教育運動. 刀江書院, 東京.
- 片岡新助. 1975. 佐藤先生とのお付き合いを顧りみて. 釧路市立郷土博物館館報, 233（合本12）: 87-88.
- 金子浩昌. 1992. 日本考古学における動物遺体研究史. 国立歴史民俗博物館研究報告, 42: 47-276.
- 川合眞平. 1933. 『釧路地方ノ堅穴』（図）
- 川合眞平 1936a. 『釧路近郊の堅穴に就て 上,中,下』. 釧路新聞4月掲載記事.
- 川合眞平. 1936b. 幕末外交史に於ける官寺の位置. 歴史と地理, p11-16. 富山房, 東京／雪の光（北海道廳立釧路女子高等學校校友會・同窓會）, 12: 12-19.
- 川合眞平. 1967. 歴史地理学上より見たる三方原台地とその周辺. 浜松短期大学研究論集, 10: 81-106.
- 川合眞平. 1970. ロシヤの南下政策と日本. 浜松短期大学研究論集, 12: 92-124.
- 川合眞平. 1971. 廳立釧路高等女學校旧職員寄稿. 五十年史. 北海道釧路高等学校創立五十周年記念事業協賛會, 釧路.
- 川合眞平. 1972. 困郭集落. 浜松短期大学研究論集, 14: 145-170.
- 川合眞平. 1976. Canada, U.S.A紀行. 浜松短期大学研究論集, 17: 110-145.
- 清野謙次. 1927. 北海道東北部に於ける人類學的探究紀行. 民族, 2（6）: 97-104. 民族發行所, 東京.
- 清野謙次. 1969. 7-4 釧路市附近堅穴及びチャシ跡の発掘. 日本貝塚の研究, p453-457. 岩波書店, 東京.
- 釧路市教育委員会. 2011. 埋蔵文化財保護の手引き. 釧路市教育委員会, 釧路.
- 久保常晴. 1935. 北海道釧路市附近の石器時代遺跡及び遺物. 銅鐸, 5: 1-3. 立正大學考古学会.
- 倉光和夫. 1934. 部報: 地歴同好會. 校友會誌, 15（創立20周年記念號）: 186. 釧路中學校校友會, 釧路.

- 河野常吉. 1908a. 非コロボツクル論. 札幌博物學會會報, 2(2):43-65. (1974復刻:『河野常吉著作集』I, p35-57. 北海道出版企画センター, 札幌)
- 河野常吉. 1908b. コロボツクル説の誤謬を論ず(上、下). 歴史地理, 12(5):34-43, 12(6):8-27. 日本歴史地理研究會. (1974復刻:『河野常吉著作集』I, p58-73. 北海道出版企画センター, 札幌)
- 河野常吉. 1924. 釧路市の史蹟. 北海道史蹟名勝天然記念物調査報告書, p183-188. 北海道廳, 札幌. (1974復刻:名著出版, 大阪)
- 小金井良精. 1903. 日本石器時代の住民. 東洋学藝雑誌, 259:151-163, 260:177-216. (1997復刻:『人類学研究』『アジア学叢書』27, p289-362. 大空社, 東京)
- 小金井良精. 1913. 故坪井會長を悼む. 東京人類學雜誌, 28(11). (1997復刻:『人類学研究』『アジア学叢書』27, p188-199. 大空社, 東京)
- 小金井良精. 1935. アイヌの人類学的調査の想ひ出. ドルメン, 4(7). (1997復刻:『人類学研究続編』『アジア学叢書』28, p361-392. 大空社, 東京)
- 釧路新聞. 1932(4月). 『先住民族の神秘』(1)~(11).
- 近藤裕幸. 2005. 8. 田中啓爾の戦前期における地理教育観. わが国旧制中学校の地理教育成立過程における地理学研究者の役割—地理教科書の分析を通して— [早稲田大学教育・総合学術院教育研究科博士(学術)論文], p120-154.
- 斎藤 忠. 1974. 日本考古学史(『日本歴史叢書』34:日本歴史学会編集). 吉川弘文館, 東京.
- 坂詰秀一. 1977. 久保常晴先生のこと. 立正大学文学部論叢, 58:3-7.
- 佐藤直太郎. 1960. 釧路市における失われたる先住民族の遺跡の話(1)~(11). 釧路博物館新聞, 97:155-156, 98:159-160, 99:167-169, 100:176-177(合本4), 釧路市立郷土博物館館報:101:2-3, 102:12-14, 103:20-21, 104:31-32, 105:39-40, 106:44-45, 108:62-64(合本5).
- 澤四郎. 1964. 釧路地方の埋蔵文化財破壊の現状2. 釧路市立郷土博物館館報, 153:7.
- 澤四郎. 1975. 佐藤直太郎先生をしのぶ. 釧路市立郷土博物館館報, 233:86.
- 杉森知也. 1997. 臨時教員養成所の設立と機能について. 教育学雑誌(日本大学), 31:94-106.
- 杉森知也. 2000. 中等教員養成市場における臨時教員養成所の位置と役割. 日本の教育史学, 43:60-76.
- 高橋伸夫. 1999. 筑波大学地球科学系人文地理学・地誌学分野の四半世紀. 筑波大学人文地理学研究, 23:105-217.
- 高畑宣一. 1894. 石狩川沿岸穴居人種遺蹟. 東京人類學會雜誌, 10(100號):2-17.
- 高山 博・米田 穰・石川 朗・加藤春雄. 2015. 北海道十勝川河口由来 洪積世頭骨の關係書簡と年代測定および同位体比分析結果. 第69回日本人類学会大会抄録, p72-73. 第69回日本人類学会大会組織委員会, 東京.
- 田中啓爾. 1949. 臨地研究の半生. 田中啓爾先生記念 大塚地理學會論文集, p1-41. 目黒書店.
- 坪井正五郎. 1888. 石器時代の遺物遺蹟は何者の手に成ったか. 東京人類學會雜誌, 3(31號):382-403.
- 坪井正五郎. 1893. 常陸風土記に所謂大人踐跡とは堅穴の事ならん. 東京人類學會雜誌, 8(88號):400-402.
- 坪井正五郎. 1895. コロボツクル風俗考 第5回. 風俗画報, 第97號. 東陽堂. (1971復刻:『日本考古学選集』2, 70-74. 築地書館(東京)所収)
- 坪井正五郎. 1910. 越後發見の石器時代火焼き場. 東京人類學會雜誌, 8(88號):400-402.
- 勅使河原彰. 1988. 日本考古学史. UP考古学選書1, p50-73. 東京大学出版会, 東京.
- 東京文理科大學(編)1929. 第一臨時教員養成所一覽. 東京文理科大學・東京高等師範學校・第一臨時教員養成所一覽 昭和4年度, p763-858. 東京文理科大學, 東京.
- 東京文理科大學(編). 1930. 第一臨時教員養成所一覽. 東京文理科大學・東京高等師範學校・第一臨時教員養成所一覽 昭和5年度, p383-448. 東京文理科大學, 東京.
- 東京文理科大學(編). 1931. 第一臨時教員養成所一覽. 東京文理科大學・東京高等師範學校・第一臨時教員養成所一覽 昭和6年度, p405-467. 東京文理科大學, 東京.
- 東京文理科大學(編). 1932. 第一臨時教員養成所一覽. 東京文理科大學・東京高等師範學校・第一臨時教員養成所一覽 昭和7年度, p421-476. 東京文理科大學, 東京.
- 東京文理科大學. 1955. 地理学教室. 東京文理科大學閉学記念誌, p271-281. 東京文理科大學, 東京.
- 富水慶一. 1976. 釧路考古学研究会創立期の活動とN.G.マンロー博士. 季刊 北海道史研究, 11:1-22.
- 豊泉清浩. 2015. 道德教育の歴史的考察(1). 文教大学教育学部紀要, 49:27-38.
- 鳥居竜蔵. 1901. 北千島に存在する石器時代遺跡遺物は抑も何種族の残せしもの歟. 東京人類學會雜誌, 17(187號):5-21.
- 浜田博文. 1992. 日本における師範学校の制度及びカリキュラムの編成過程(続). 学校経営研究, 17:96-109. 大塚学校経営研究会.
- 西 幸隆(編). 1989. 幣舞遺跡調査報告書. 釧路市埋蔵文化財調査センター, 釧路.
- 西脇対名夫ほか. 2018. 6堅穴群の保護. 北海道の堅穴群の概要(暫定版), p17-22. 北海道教育委員会, 札幌.
- 羽賀憲二. 1975. 札幌市・琴似川流域にあった堅穴住居址群—明治中頃に作られた堅穴分布図について—. 北海道考古学, 11:91~99.
- 北海道廳. 1918. 2-10 納内及び神居古潭の遺跡. 北海道史附録地圖. 北海道廳, 札幌.
- 松井圭介・兼子 純. 2014. 大学院におけるフィールドワーク教育の実践:筑波大学人文地理学・地誌学教室の事例. 筑波大学人文地理学研究, 34:107-125.
- 松浦武四郎. 1865. 東蝦夷日誌 七編 久摺. (1960:松浦武四郎蝦夷日誌集(『釧路叢書』第1巻)収録, p108-113. 釧路市, 釧路)
- 山本武雄. 1974. 8-3-2 区画整理の拡大. 新釧路市史1:937-955. 釧路市, 釧路.